Vol.1

「文化学は社会で役立たない」は、誤解です。

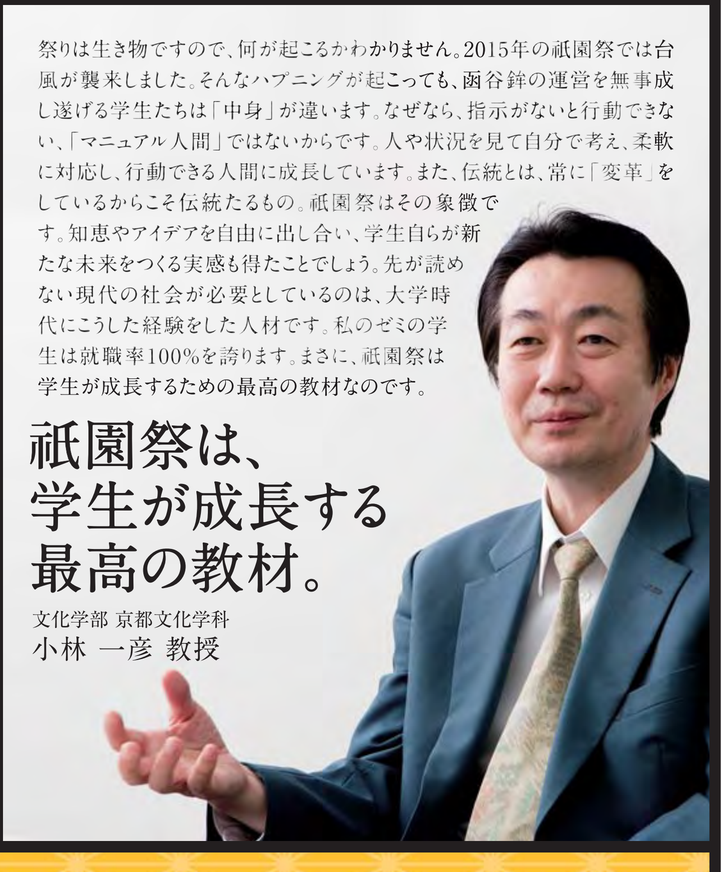
祇園祭の運営に学生が挑戦!
京都の街で「社会人基礎力」を鍛える。

千年を超える歴史を誇る祇園祭。しかし、地域の高齢化に伴い、祭りの担い手が少なくなったことで、代々継承されてきた町衆の手による運営が難しくなってきている。そこで、数年前から文化学部の小林一彦ゼミでは、花形の鉾のひとつである函谷鉾（かんこぼこ）の運営をサポート。鉾の案内や厄除けちまきの販売、近年増加する外国人観光客への対応など、さまざまな運営を学生たちの手で行う。地域社会に貢献する一方、こうした取り組みは、「チームで働く力」といった社会人基礎力の養成にもつながっている。「社会人基礎力育成グランプリ2016」では、こうした祇園祭の運営を通して社会人基礎力をどれだけ伸ばしたかをゼミ生たちがプレゼンテーション。予選大会を勝ち抜いて全国決勝大会に進出するという快挙を成し遂げた。京都の伝統行事は確実に学生たちの「社会に活かす力」を育んでいる。

得たものは、チームで働く力や「できる」という自信。

文化学部 4年
藤田 知彩子さん

高校時代から京都に憧れ、「京都の文化を学びたい」という思いから京都産業大学に進学。1146回目という伝統ある祇園祭のメンバーとして自分が役割を果たせたこと、さまざまなアクシデントを乗り越えて祇園祭をやり遂げることができた達成感はひとしおです。最初は社会人の方にメールを送るのも緊張するほどでした。しかし、学生同士はもちろん、函谷鉾保存会の地域の方々と協働し、世代を超えてチームで働くことで社会人基礎力が養われました。また、自分たちの考えやアイデアを取り入れてもらえたことで「私たちはできる」という自信が生まれました。今後も失敗を恐れず、新しいことにどんどん挑戦していきたいと思います。



祭りは生き物ですので、何が起こるかわかりません。2015年の祇園祭では台風が襲来しました。そんなハプニングが起こっても、函谷鉾の運営を無事成し遂げる学生たちは「中身」が違います。なぜなら、指示がないと行動できない、「マニュアル人間」ではないからです。人や状況を見て自分で考え、柔軟に対応し、行動できる人間に成長しています。また、伝統とは、常に「変革」をしているからこそ伝統たるもの。祇園祭はその象徴です。知恵やアイデアを自由に出し合い、学生自らが新たな未来をつくる実感も得たことでしょう。先が読めない現代の社会が必要としているのは、大学時代にこうした経験をした人材です。私のゼミの学生は就職率100%を誇ります。まさに、祇園祭は学生が成長するための最高の教材なのです。

祇園祭は、学生が成長する最高の教材。

文化学部 京都文化学科
小林 一彦 教授

社会に活かす文化学